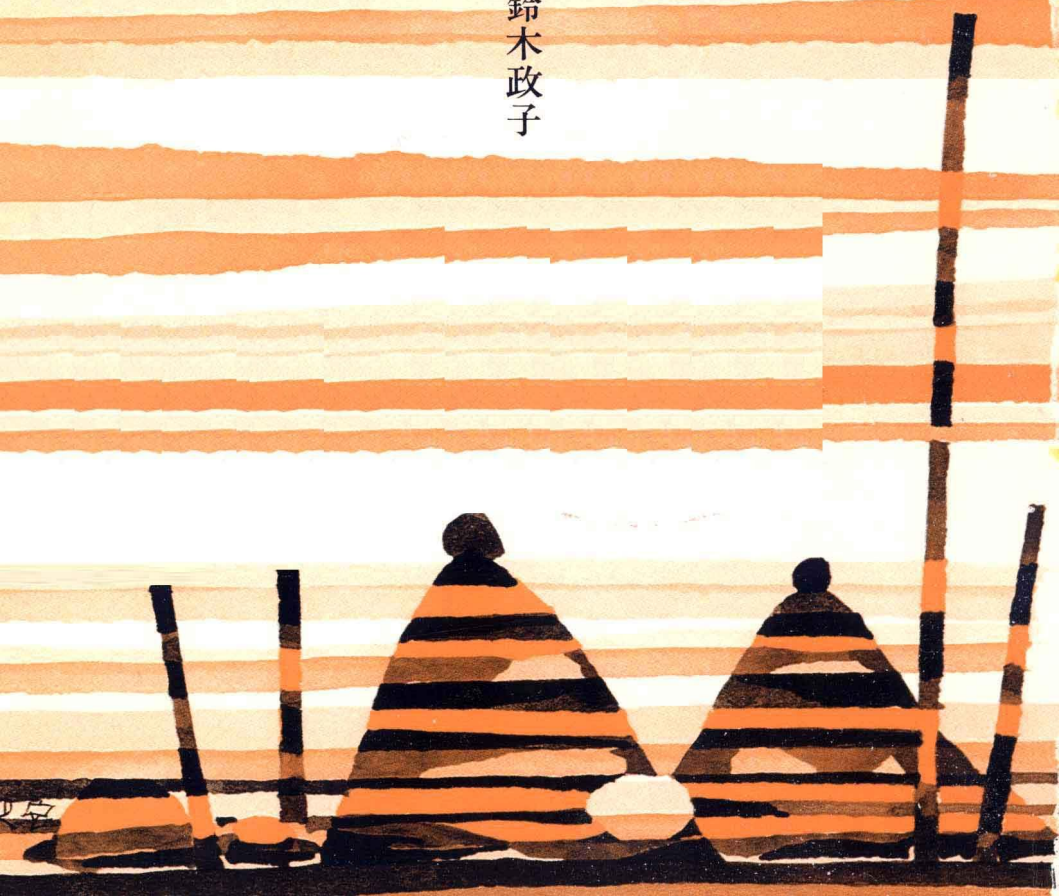
あの日夕焼け

●母さんの太平洋戦争

鈴木政子・作　駒宮録郎・絵

あの日夕焼け

鈴木政子



913　鈴木政子
あの日夕焼け

立風書房　1980

169P　23cm

あの日夕焼け

1980年6月20日　第1刷発行
1980年10月15日　第4刷発行

定価 880円

●母さんの太平洋戦争
あの日夕焼け

著　者　鈴木政子
発行者　下野　博
発行所　株式会社立風書房
〒141　東京都品川区東五反田三―六―十八
電話　〇三―四四七―一一九一
振替　東京五―七四四九三
印刷　信毎書籍印刷株式会社
株式会社美術版画社

乱丁・落丁本はお取り替えいたします
8093-R3901-8909

©鈴木政子　一九八〇年
日本音楽著作権協会(出)許諾第800694号

●まえがき

母さんの願い

孝一、一哉。

母さんは今、沖縄に来ています。生まれて初めて飛行機に乗り、太平洋戦争の最後の激戦地であった沖縄に来ています。そして島の南端の戦跡公園を訪れ、摩文仁丘に立つ「黎明の塔」をあおいでいます。摩文仁丘は、太平洋戦争で全滅した、沖縄の日本軍が最後をとげたところです。

沖縄の戦いは、五年にわたる太平洋戦争の中でも、最もはげしい戦いでした。神奈川県ほどの大きさもない小さな島で、三か月のあいだに、八万五千人もの住民をふくめ、日本側で十六

万人余り、米軍側で一万人以上という、たくさんの人びとが戦死したのです。

この人たちの霊をなぐさめるために、いま戦跡公園には、たくさんの慰霊塔が建てられています。丘のいちばんの高台に立つ「黎明の塔」も、その中の一つです。この塔には、摩文仁丘でなくなった、日本軍の霊がまつられています。

日本軍とたくさんの住民が、島の南端であるこの丘に追いつめられ、陸からも空からも海からも、はげしい攻撃を受け、あるいは自決し、あるいは壕の中で、火焔放射器の火に焼かれて死にました。

摩文仁の戦いが終わって、沖縄戦も終わり、そのあと二か月足らずで、太平洋戦争も終戦をむかえます。

いまこの丘に、当時の激戦を思わせるものは、もう何もありません。すみきった青空の下、真っ赤なハイビスカスや、デイゴの花が、緑の丘に咲きみだれています。

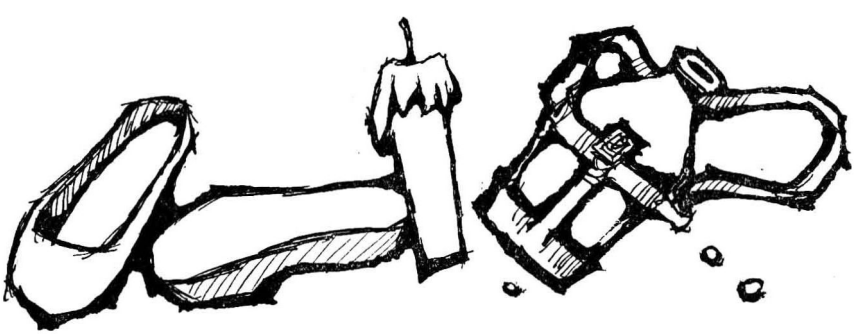
试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

海が見えます。青い青い海です。これが東シナ海です。寄せて来た波が引いて行くときに、白い砂地の上を、水の色が走ります。その言いようもなく美しい青さを、あなたたちにも見せてあげたいなあと思います。

と同時に、この海の色を見ながら、母さんには、ちょっとうまく表現できそうにない、重い痛みがうずいてくるのです。その痛みのことを、うまくは表せないかもしれないけれど、どうしても、あなたたちに伝えて置きたいと思います。

母さんは、「黎明の塔」の前に立って、この戦争でなくなった、たくさんの人たちのことを思いました。

摩文仁丘の、たくさんの戦死者のことを思いました。そして、この広い東シナ海の果て、終戦の満州（今の中国東北部）でなくなった、母さんの大ぜいの知り合いや、お友だちのことを思いました。中国の土になった、母さんの四人の弟や妹たちのことを思いました。



みつる、仲子、クニ子、公男、生きていたら、もうみんな、りっぱな大人になっているでしょう。そのきょうだいたちが、あのときのままの幼い姿で、

「姉ちゃーん。」

と呼びかけながら、母さんの方へ走って来る——。いや、弟たちだけでなく、お友だちも、知り合いも、沖縄戦でなくなった人たちも、みんながこちらへ、母さんの方へ走って来る。みんながこちらへ駆けて来る足音を、母さんは全身に感じます。母さんの心の中で、重たいひびきが鳴るようです。

重たくて、悲しいひびきです。悲しいからといって、泣けば消えるひびきではありません。心の中に、こんなひびきを感じている人が、日本国中、いいえ、世界中にたくさんいると思います。

そして、いつまでも鳴りやまない、このひびきを胸にして、みんなが平和を願いながら生きているのだと思います。母さん

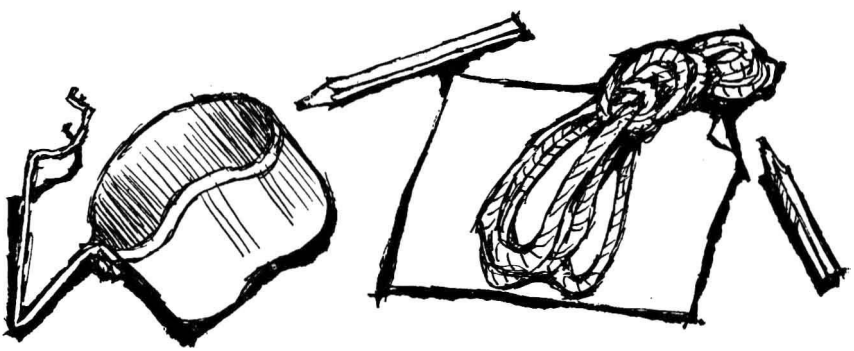
もそうです。

中学生になった孝一、小学四年生の一哉、母さんはあなたたちに、小学五年生、十歳だった母さんが、満州でむかえた戦争と、終戦のときのお話をしておきます。

あなたたちに、ぜひ、

「戦争って、かっこいいもんじゃないんだ。」

ということを、分かっておいてもらいたいのです。



もくじ

●まえがき　1
小さな学校　10
終戦の日　20
まつばぼたん　31
仲秋節（ちゅうしゅうせつ）　50
一円札　68
錦州（きんしゅう）へ　86
赤いチャンチャンコ　94
満州育ち　106

冷たい病室 118

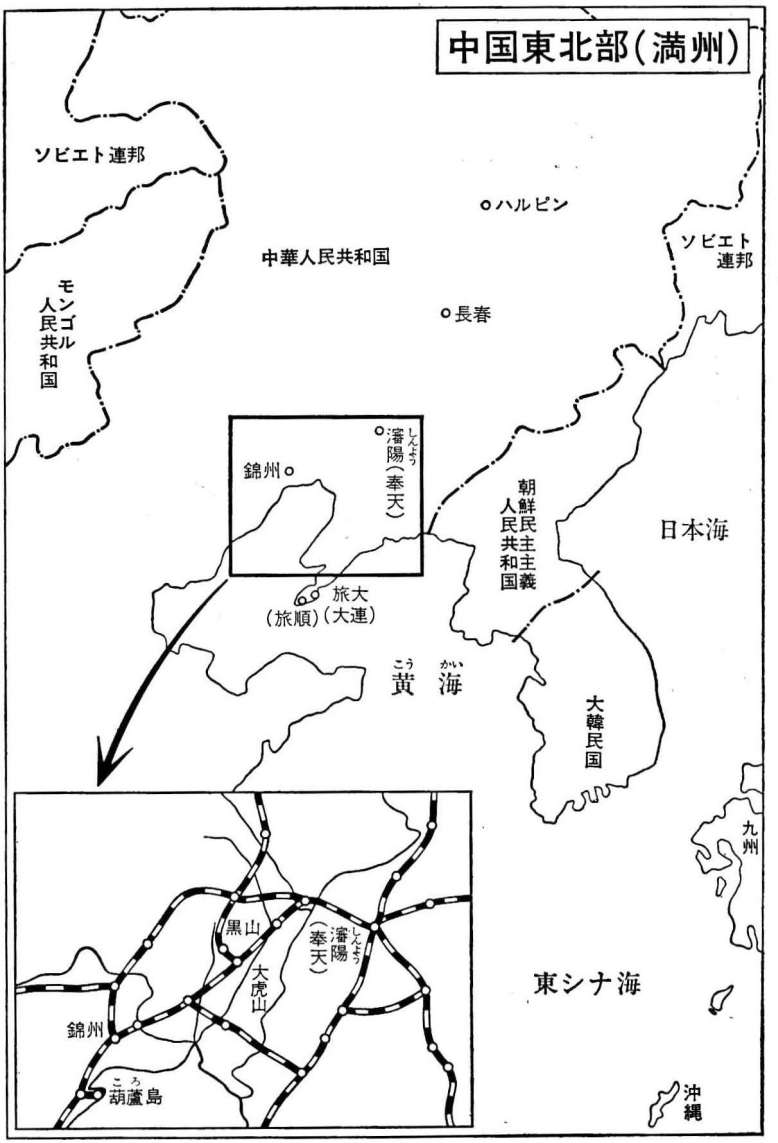
南山に眠る 135

五月の夜空に 144

さようなら満州 153

●あとがき 167

▒装画・さし絵　駒宮　録郎



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

●母さんの太平洋戦争

あの日夕焼け

鈴木政子

小さな学校

平家建ての小さな学校、生徒が一年生から六年生まで十七人。先生は、校長先生と若い女の先生の吉田先生。それに用務員の張さんの三人、ほんとうに小さな学校です。

わたしはそこの学校の五年生、今は二時間目の授業で、全校生徒が参加しての体育の時間です。

「今日は体操するのいやだなあ。」

と思っていました。なぜって、ツベルクリンをしたあとが水ぶくれになり、手を上にあげるとつぶれそうなんです。でも校長先生が台の上で体操のお手本を示しながら、にらんでいます。

「こらッ、まさこ、もっとちゃんと手をあげて——。」

とうとうおこられました。このこわい斎藤校長先生はわたしの父なのです。

朝礼のときにも、天皇陛下のお言葉として、そのころたいせつなものと考えられていた教育勅

語を暗唱させられ、まちがえておこられましたから、今日はこれで二度目です。校長先生がお父さんなんていやだなあ、すごくきびしいんだから、といつもいつも思っていました。でも仕方がないんです。こんな小さい、先生が二人しかいない学校だから。

「つぎ、かけあし。先生のあとについて来い！」

校舎の前にある、ほんものの運動場はせまいのですが、それに続く草原は、緑のれんげ草にうずめられ、広く広く、どこまでも広がる大運動場でした。

「あっ。」とつまずいたものを見たら、人間の頭がい骨だったりすることが、よくありました。ここでは、親より先に死んだ子は、不孝ものとして、草原に捨てられる風習がありました。

れんげの畑のずっと先は、はてしなく広がる高りゃん畑でした。そんな広い広い草原を、二人の先生と、白いハチマキをした、十七人の子どもたちがかけ回るのです。

ここは日本から、東シナ海と黄海という、大きな海を二つも越えて、遠くはなれた満州国（いまの中国東北部）です。わたしたちの学校は、その満州国の錦州省黒山県黒山街にある、黒山在満国民学校です。創設されて二年目で、黒山県にいる日本人の子どもたちのための小学校でした。

昭和二十年八月、あついさかりですが、まだ夏休みにはなっておりません。満州の冬はものす

ごく寒いので、冬休みを長く休むかわりに、夏休みは短いのです。

学校は黒山街の中心部にありました。街で商業などをいとなんでいる日本人の子どもたちと、学校の西の方にある、西門裡官舎の子どもたちとが通学しています。西門裡官舎というのは、おもに黒山県の職員や警察官、教職員たちが住んでいる、二十戸ばかりの公務員住宅です。わたしはその西門裡官舎から、三年生の弟まさるとともに、お友だちといっしょに集団で通学していました。

学校から家までは、二十分くらい歩きます。今日も六年生の明子ちゃんを先頭に、十人の子どもたちが、続いて帰路につきました。帰る道の途中に市場があります。いろいろなものが、ぎっしり並べて売られているのです。

きれいな色のなつめやあんず、からつきの落花生、砂糖をまぶした落花生などが、かごにもられています。いくつもいくつもつながったソーセージが、のれんのように棒にぶらさがっています。黄色や空色の、いろいろな小鳥が、かごの中ではばたいています。

あちらの角では、おいしそうな焼き豚が、その横ではチェンピン（大豆と高りゃんの粉をねって焼いたもの。この地方の中国人の昼食でした。）が香ばしいにおいをまきちらし、ギョウザがじゅうじゅう湯気をたて、中華まんじゅうが、蒸し器の中でふっくりふくれています。

わたしたちは立ち止まって、それらに目をこらし、のどをごくんごくんいわせながら、がまんして、それでもゆっくりゆっくり通るのです。

早く帰らなければ、官舎で待っている母たちが心配するとは思うのですが、市場を通りすぎると、ついつい今度は、満人（この地方の中国人を当時はこう呼んでいました。）の子どもと遊び始めます。

満人の家は、石と土でがんじょうに造られています。中をのぞくと、ししゅうをしたきれいな布絵がかけられ、色あざやかな、さまざまな絵が張られ、薄暗く、とても神秘的なふんい気を感じます。

そんな家の前で子どもたちは、しゃがむとおしりの出る満服を着て（そのまま、どこででも用を足してしまうので、きたないなあと思っていました。）、砂いじりをしたり、おわんや竹づつなどで、ままごと遊びのようなことをしています。

その横では、放し飼いの豚が、子豚を何匹もしたがえて、くぼ地のどろ水の中をころがり、どろんこになって遊んでいます。

わたしたちは満人の子どもの中へ入り、はじめは仲よく遊ぶのですが、そのうち、ままごとのおわんを取り上げたり、竹づつの水をわざとこぼしてしまったり、頭をぶったりして、いつでも

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com